

パルンティ江東通信 vol. 11

テレビの世界



【テレビCMで・・・】

リビングでごろごろしているこどもに小言を言うお母さん。それに対して口ごたえをしたこどもに対して、お父さんが怒ります。

「ママはいつもお前たちのために頑張っているんだぞ！」



【テレビ番組】

メイン司会者の男性の横で、若くて美しい女性がアシスタントとして立っています。

後ろにも若くて可愛い女性がたくさん、明るい笑顔を振りまいています。



【新番組の紹介】

「これまでの政治や経済を中心とした硬派なイメージを一新し、女性をターゲットに芸能情報やグルメ情報を中心とした情報番組に模様替えしました。

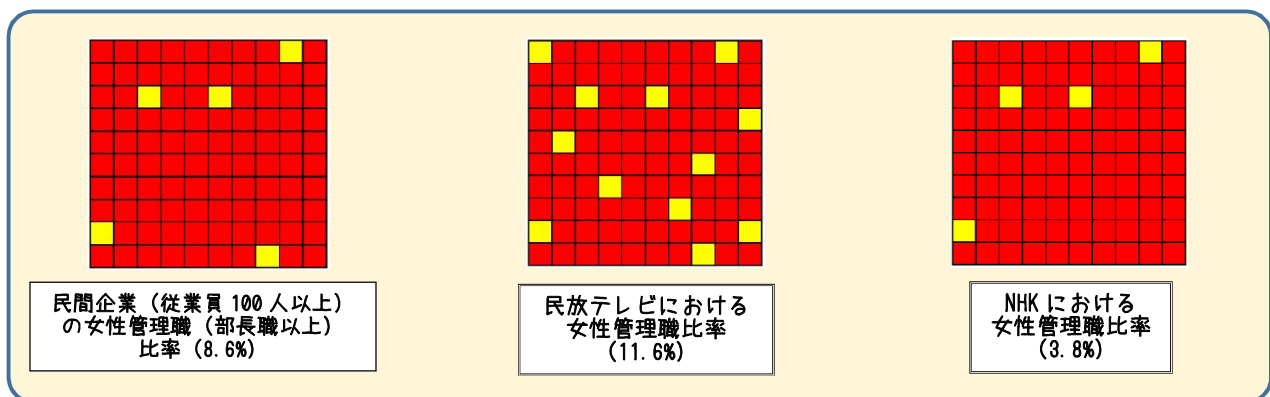
毎日のようにテレビで見るこのような場面。私たちは特に違和感もなく、もっと正確に言うならば何も意識をせずにこのようなテレビ番組やCMを見ています。

でも、ここまでメルマガを読んで頂いた皆さんは、少しだけ意識をしてみると何か気がつくのではないのでしょうか。女性が家事をすることは「母親の愛情」という描写、多くの番組では司会は男性がメインで女性がアシスタントである、女性は政治・経済ではなく、芸能情報やグルメなど「軽い」内容が好き…など、固定的な性別役割に基づいたイメージがそのまま描写されています。それに対して、以前より少し増えたとはいえ、男性が率先して家事をしている場面や、女性がメインで男性がアシスタントをしている番組、あるいは女性を対象とした「硬派」な番組といった、固定的性別役割に合わない描写や番組は数が少なく、私たちが目にする機会は限られています。

もちろん、上で挙げたような、女性が家族のために愛情をもって家事をしているという描写や女性アシスタントが笑顔で番組を明るくしている様子が悪いわけではありません。これらは女性がイキイキと積極的に活動している姿を描写していますし、受け手側にとってはむしろ好感度の高いものでしょう。頑張る妻を支える良き夫、サポート役を認めて場を滞りなく勧める男性司会者も、非常に好感が持てるでしょう。だから決してこれらの描写それ自体が悪いというわけではありません。また、テレビ番組やCMのこのような描写は私たちの実生活に近いから使われているということもあります。

しかし、そのような描写にばかり触れていると、元々持っていた固定的なイメージがさらに強固なものとなり、それらと合わない生き方は「普通ではない」という受け止められ方をされる可能性があります。そうすると、固定的なイメージ、固定的な性別役割分担とは異なるような生き方を想像したり、選択することが難しくなってしまうかもしれません。でも、逆に固定的な性別役割意識と合わない描写が増えてくれば、自分の役割や生き方の選択肢を広げることにつながります。例えば、男性が料理や家事をする番組やCMが増えてきたことで、一昔前までは「男子厨房へ入るべからず」とさえ言われていたのに、最近では男性が料理をすることに關しては積極的に受け入れられているようになってきました。サッカーをする女の子の増加には、なでしこジャパンの活躍が大きな影響がありました。このように、テレビやメディアの発信する情報や描写、イメージは、私たちに大きな影響を与えているのです。

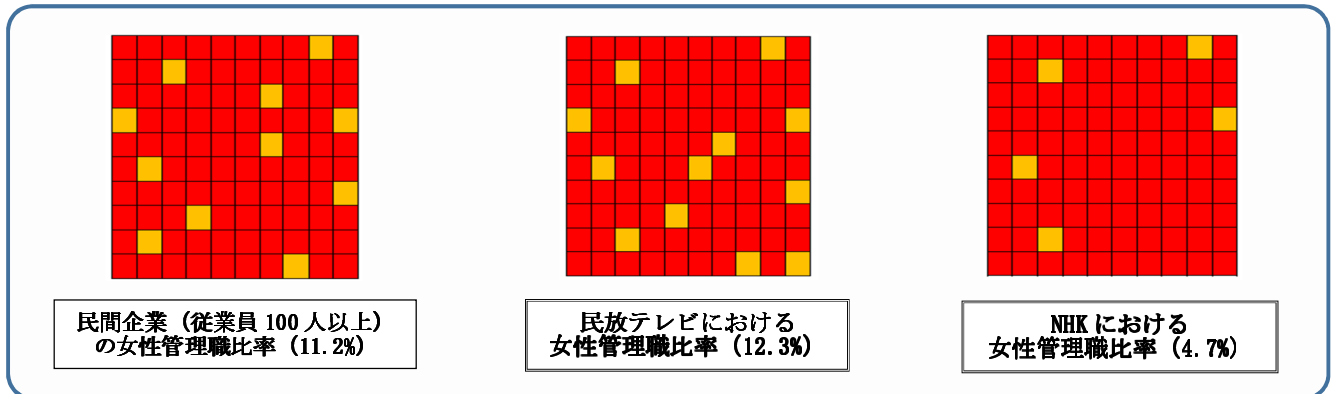
ところで、メディアの世界で性別役割意識に沿った描写ばかりになっている大きな要因の一つは何だと思いませんか？そのヒントは以下の3つの図にありますので、その要因を想像してみてください。



次号に続く

テレビの世界②

前回、テレビ番組やCMの中での描写が、いかに伝統的な固定的性別役割意識に沿ったものが多いか、そして、その大きな要因の一つとして、下の図を挙げました。



上の図のうち、右の二つは、どのようなテレビ番組を作るか、どのような番組でどのような情報を伝えるかなどを決定する立場にあるテレビ局の管理職の男女比を表していますが、圧倒的に男性管理職の割合が高いことが分かります¹。一番左のグラフは、テレビ番組のスポンサーとなりCMのイメージなどを依頼する立場である、大企業の管理職の男女比率です。こちらも、圧倒的に男性管理職の割合が高いことが分かります。つまり、私たちが日常的に接するテレビ番組の内容や情報、CM内の描写について決定する立場にいる人の大部分が男性であるということです。女性がほとんどいない会議では、女性側の見方や意見が反映されることは難しいでしょう。

それに、現在管理職の立場にある男性は（女性もですが）、年齢的に今よりも固定的性別役割意識の影響を受けた暮らしをしてきた方々が多いと思われます。それはその時代には当り前のことだったのですが、近年の社会状況や経済状況は日々大きく変化しており、これまでの固定的性別役割意識に即した暮らし方や生き方が、必ずしも今の社会で求められているものではなくなってきているのです。

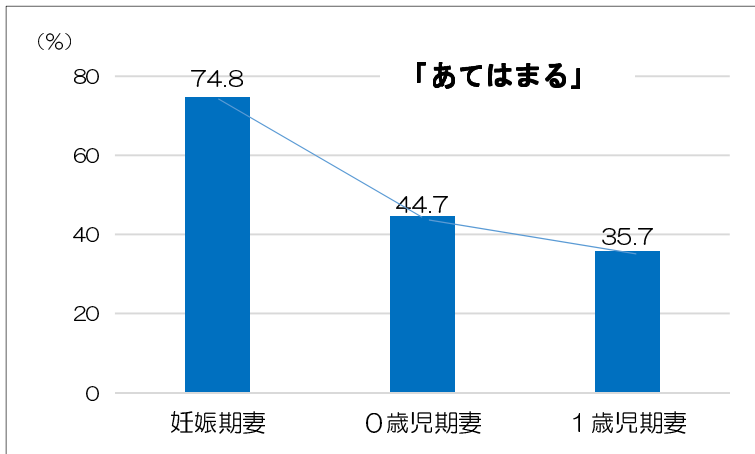
前回、メディアで見られる男女の性別役割の描写は否定的なものとは限らず、むしろ肯定的・好意的に描かれているものが多いことも書きました。しかし、これからの日本社会を考えると、これまでどおりの伝統的な考え方を変えていかななくてはならないことも増えてきています。その際に、「男性はこうである」「女性はこうである」という男女の固定的なイメージに多く接することは、無意識のうちに関係以外の選択肢の可能性を見えにくくしてしまいます。また、今回挙げたテレビ番組やCMのほかにも、例えば歌の歌詞、子ども達が読む絵本なども、意識をして見ると固定的性別役割意識にあふれています。

日本は今、これまでの「男性の役割」「女性の役割」を越えて、一人一人の能力や志向によって「男性も女性も意欲に応じてあらゆる分野で活躍できる社会」に向けた、転換期にきています²。私たちの意識に大きな影響のあるテレビやCMの中で、もしもこれまでの固定的性別役割とは異なる生き方や職業で生活する姿に多く触れることができたら、観る人の中での生き方の選択肢が広がることにつながるのではないのでしょうか。特に若い世代や子ども達が様々な生き方や職業が「普通」であると感じられるようになれば、企業の管理職・テレビ業界の管理職の女性比率も上がり、それによってますます男女双方の意見が反映された、固定的性別役割意識に縛られない描写が増え、それがますます生き方の選択肢を増やすことにつながるでしょう。

次にテレビやCMを観るときには、その描写が固定的性別役割に基づいているかどうかを少しだけ意識して観てみませんか。

¹ 平成 25 年度版『内閣府男女共同参画白書』より抜粋

² 内閣府男女共同参画局HP『男女共同参画とは』より抜粋



左のグラフは、女性が妊娠期、0歳児を子育て中、1歳児を子育て中に聞いたある質問に対して「あてはまる」と答えた女性の割合を表しています。妊娠期、子供が0歳、子供が1歳となるにつれ、「あてはまる」と答えた人の割合が大幅に減っていますが、さて、これはいったい何について「あてはまる」と答えているのでしょうか？

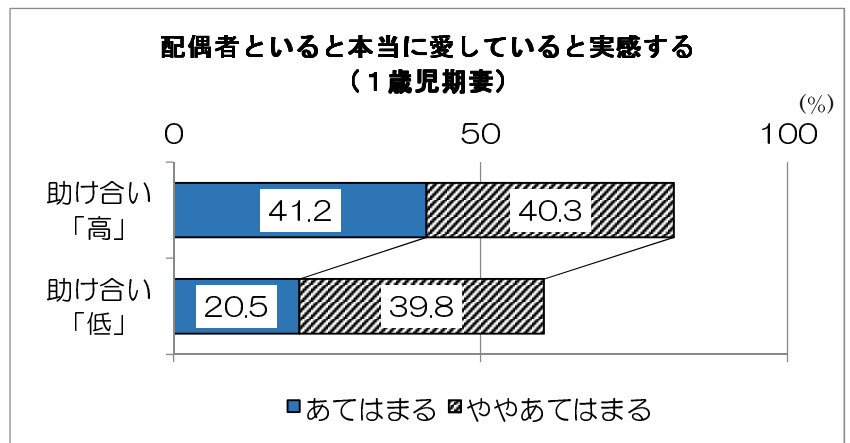
答えは「配偶者といると本当に愛していると実感する」という回答の割合です¹。妊娠期に約

75%の女性が「配偶者を本当に愛している」と感じているのに、子どもが1歳児になる頃にはその割合が約36%まで落ちていきます。子どもが産まれる前にはあったはずの夫に対する愛情が、ほとんどの夫婦にとって幸せなイベントのはずの出産・育児を経てこれほど少なくなってしまうのはなぜでしょうか。もちろん、すべての夫婦で妻の夫に対する愛情がこれほど急激に下がってしまうわけではありません。出産後も変わらず夫に愛情を感じ続ける妻も、もちろんたくさんいます。その違いはどこにあるのでしょうか。どうやらそこに、ヒントが隠されています。



1. 家事・育児の助け合い

まず、右のグラフを見てみましょう。ここでは同じ質問について、回答者（1歳児期妻）を「配偶者と家事や育児の分担を助け合っている」と感じている女性たち（「助け合い・高」群）と、そう感じていない女性たち（「助け合い・低」群）とに分けて見たものです²。「助け合い・高」群と「助け合い・低」群を比べると「助け合い・高」群の方が配偶者に愛情を感じると答える人の割合が高く、特に「あてはまる」という回答で大きな開き



があります。ここから、1歳児期の子どもを育てている妻にとって、配偶者がどのくらい家事や育児の分担を助け合ってくれていると感じられるかが、配偶者に対する愛情の強さと大きく関係していることがわかります。

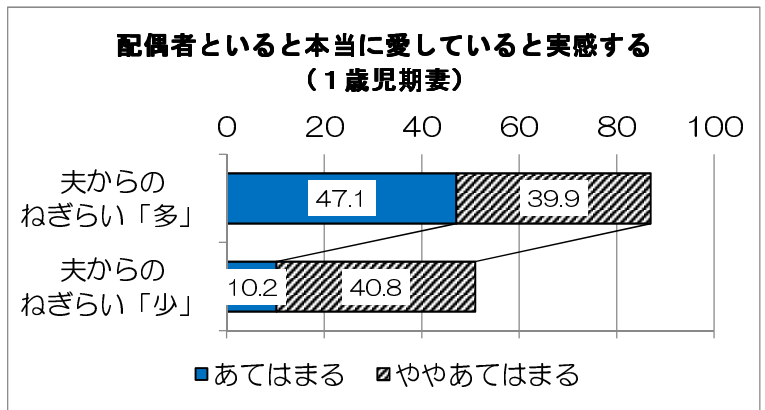
出産後もずっと妻から変わらぬ愛情を受けたい男性は、ぜひ積極的に家事や育児に協力しましょう！

¹ 今回のデータはすべて、Benesse 次世代育成研究所『第1回妊娠出産子育て基本調査・フォローアップ調査』（2011年4月）から抜粋しています。

² 「助け合い・高」群＝「私と配偶者は、子育てや家事などの分担に関してお互いに助け合っている」という質問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した女性、「助け合い・低」群＝「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答した女性。

2. 妻へのねぎらい

そうは言っても、「仕事が忙しくて、家事や育児に協力する時間なんてないよ」…という男性も多いと思います。実際、日本の男性は世界的に見ても長時間労働ですし、育児休業の取得率も非常に低いことが分かっています（この辺りのことは次回の『パルシティ江東通信』で触れたいと思います）。では、家事や育児をしたくても時間がなくて出来ない男性は、ただ妻の自分への愛情が薄れていくのを待つしかないのでしょうか？



そんな事はありません。もう一つ別のグラフを見てみましょう。右のグラフは、上と同じ質問を、今度は「夫からのねぎらいが多い」と答えた女性と、「少ない」と答えた女性とで分けて見たものです³。

「夫が、私の仕事・家事・子育てをよくねぎらってくれる」と感じている女性と、あまりねぎらわれていないと感じる女性とでは、夫に対して感じる愛情に大きな開きがあります。特に、夫への愛情をはっきりと肯定する「あてはまる」という回答をみると5倍近くの開きがあることが分かります。つまり、夫からのねぎらいを感じられるほど、夫に対する愛情も持続するということが分かります。つまり、上で挙げたように、実際に「家事・育児の分担」をしたくてもできない男性は、せめて妻に対してねぎらいの気持ちを表すことは忘れないようにしましょう！

出産・育児によって、それまでとは大きく生活が変わります。特に今の日本社会では、この時期の生活の変化は男性よりも女性の方がはるかに大きい場合がほとんどです。ほとんどの男性は、赤ちゃんが生まれても、それまでと同じ時間に出勤し、同じように帰宅するでしょう。男性にしてみれば「俺だって赤ちゃんと一緒にいたいけど、家族のために働いているんだ」「妻は一日中家で赤ちゃんを過ごさせて羨ましい」と感じるかもしれません。



でも、女性の場合は出産や育児による心身の大きな変化だけでなく、生活そのものが大きく変わります。仕事をしていた女性は、出産によって退職を選ばざるを得なかったり、あるいは自ら退職・休職をすることで社会から取り残された気分になったり、赤ちゃんの世話だけでなく、一日家にいることでそれまで



夫が分担していた家事も自分が担当することになって「何故、自分ばかり」と感じるかもしれません。このような心のすれ違いが、愛情の減少へとつながるのではないのでしょうか。

子育て中のみなさんのご家庭ではどうでしょうか？子育てが終わったみなさんのご家庭ではいかがでしたか？将来、子育てをする可能性があるみなさんは、将来パートナーとはどのような関係を築きたいと思いますか？

次号：『男もつらいよ』

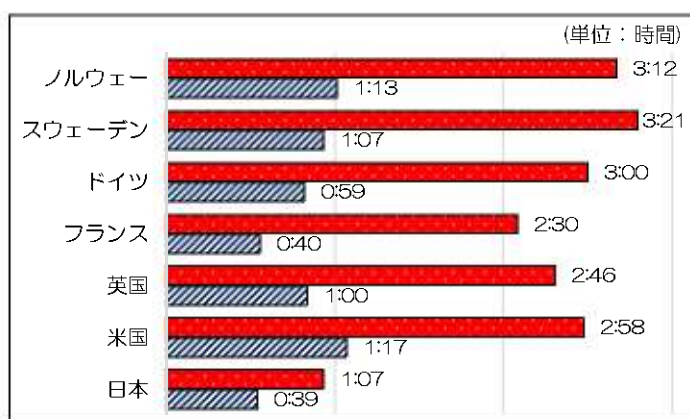
今回の『パルシティ江東通信』では、出産・子どもが乳児期に、妻から配偶者に対する愛情が急激に薄れていくというデータをご紹介しました。ただ、今回はご紹介できませんでしたが、実は夫から妻に対する愛情も、妻から夫ほどではありませんが、同様に減少していました。「家事・育児を分担してって言われても、外では仕事、家では家事も育児も…全部俺がやるの？」と感じる男性も多いと思います。次号では「男もつらいよ」というテーマで、日本の男性がいかに大変な環境の中で頑張っているのかを見てみたいと思います。

³ 「夫からのねぎらい・多」群＝「私の配偶者は、私の仕事、家事、子育てをよくねぎらってくれる」という質問に対して「あてはまる」「ややあてはまる」と回答した女性、「夫からのねぎらい・少」群＝「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」と回答した女性。

男もつらいよ？



下のグラフをご覧ください。7カ国の比較データですが、何を表しているのかお分かりになりますか。



これは、6歳未満の子どもがいる家庭の、男性の家事・育児関連時間を表したグラフです。各国の上のグラフ（赤）は家事関連時間全体を、下のグラフ（青）はそのうちの育児時間をあらわしています¹。日本は、欧米6カ国と比較すると、小さな子どもがいる家庭の男性が家事関連に費やす時間は1時間7分、その内育児の時間は39分と、際立って短いことが分かります。皆様のご家庭、ご自分の育ってきたご家庭と比べていかがですか？

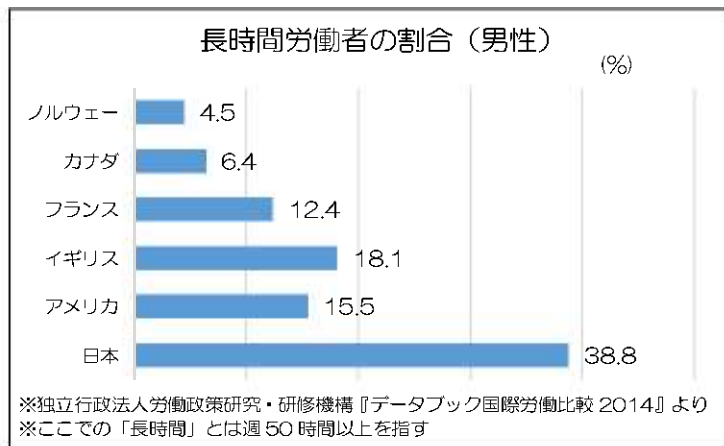
世界に名だたる「ジャパニーズ・ビジネスマン」！

前回の記事『子育て夫婦はご用心?!』で、子どもの出産を境に妻から夫への愛情が急激に低下する傾向がありました (Vol.13 参照)。そして、小さい子どもを育てる女性にとって、どのくらい「家事や育児の分担を助けてくれている」と感じられるかが、配偶者に対する愛情の強さと大きく関係している傾向がありました。そして今回ご紹介したデータを見ると、多くの男性は「家事・育児の時間を取りたい」と望んでいるのにそれが叶わない状況にある事がわかりました。つまり、多くの男性は家事・育児を共有する意欲はあるにもかかわらず仕事に費やされる時間が長いためにそれができず、その間に「家事・育児を共有してくれない」と感じる妻からの愛情が減ってしまうという、なんとも切ない状況が生じるのです。

「女性の活躍推進」を語る時には、必ずと言ってよいほど「男性の家事・育児参加」も合わせて言及されます。多くの場合、女性側からの不満として「もっと男性に家事をして欲しい」「子育てをして欲しい」という声が紹介され、「働く女性は仕事も家庭も両方を求められて苦しい」という訴えが紹介されます。

なぜ日本のお父さんたちは、家事や育児をしないのでしょうか。一つには、これまで何度も書いてきたとおり私たちの住む日本では「男子たるもの家事育児なんてするべきではない」という固定的性別役割意識が根強くあります。しかし、最近は男性も女性も意識が変わり、「カジダン（積極的に家事をする男性）」「イクメン（積極的に育児をする男性）」も増えてきています。実際に、仕事だけでなく家庭生活も時間を取りたいと考えている男性は実は多くいる事がわかっています。それにもかかわらず多くの男性が仕事中心の生活を送っている背景には、日本の男性は世界的に見ても長時間労働を送っている状況があります。次ページをご覧ください。

¹ 内閣府『男女共同参画白書』（平成27年版）より抜粋



左のグラフは週 50 時間以上働く労働者の割合を示していますが、日本の男性の労働時間の長さが突出しており、いかに残業時間が多いかが分かります。日本では、多くの職場で繁忙期以外にも残業することが習慣になっていて、なかなか自分だけが定時で帰ることが難しいということもあるようです。

さらに、毎日の長時間労働に加えて、日本では休暇の取りにくさもあるようです。下の表を見ると、日本は世界の中で見ても付与される有休日数は決して少ない方ではないのですが、その消化率が低く、

また取得に際して罪悪感を覚える割合が高くなっています。本来、有給休暇は理由を問わず取ることができる権利で、理由を申告する必要もないのですが、個人的な理由、家族のためという理由で有給休暇を取得することに抵抗を感じる、あるいは取りづらさを感じる人が多いようです。

「男性は仕事、女性は家庭」という固定的性別役割意識が依然として根強い日本で、このように日々長時間働いて、家族のためや自分のために休みを取ることもままならない男性に向かって、「もっと家事も育児も！」と求めるのでは、男性から「長時間仕事をし、家に帰れば家事も育児もなんて、やっつけられない！」という声が上がることになって無理はありません。「夫は毎日夜遅くに帰ってきて、ご飯を食べてお風呂に入って寝るだけ。家のことは何一つしない！」という妻の声と「仕事でヘトヘトなのに、家に帰ればあれもこれもやってよ、と言われて休めない」という夫の声…どちらの辛さも分かりますし、どちらの言い分ももっともですね。

	有給休暇消化率	有給休暇消化日数 / 付与日数	有給休暇取得に罪悪感を覚える
フランス	100.0%	30日/30日	6.0%
イタリア	83.0%	25日/30日	4.0%
アメリカ	73.0%	11日/15日	10.0%
シンガポール	93.0%	14日/15日	5.0%
日本	60.0%	12日/20日	18.0%

※Expedia『世界 26 カ国有給休暇国際比較調査 2015』より抜粋

「男も女もつらい社会」を変えよう！

妻も夫も双方が「仕事も家庭も両方バランスよく暮らしたい」、「家事・育児は助け合いたい」と望んでいるにもかかわらず、それが叶わないのが今の日本の実情です。

政府が提唱している「一億総活躍社会の実現」では、その願いを叶えるための大きな柱として「女性が輝く社会を創ることが必要不可欠」としています。そして、そのためには、男性中心の長時間労働を前提とする働き方文化を改め、男性にも家事や育児を担ってもらわなければならないと述べています。

今の日本では、男性が長時間働くことが当たり前、家族や個人のために休むのは気が引けるので休暇を取らない、という状況があります。そのため、女性が仕事をするとすると、仕事も、家事も、育児も女性が担うという偏った状況になってしまいます。そこで、家事と育児の負担を男性にも求めるとすると、今度は男性が長時間労働に加えて、家事も、育児も、となってしまう、男性に負担が偏ってしまいます。

男性が家事や育児をすることが普通である環境になり、女性が社会に活躍するためには、性別にかかわらず誰もがそれぞれのライフステージの状況に応じて仕事と家庭、個人の時間の望ましいバランスを保って生活できるような社会にすることが必要です。

まずは皆さん自身や、ご家族の理想のワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）を考え、その実現のために何が出来るかを話し合ってみてはいかがでしょうか。

わたしたちの男女共同参画

教育分野



経済分野



保健分野



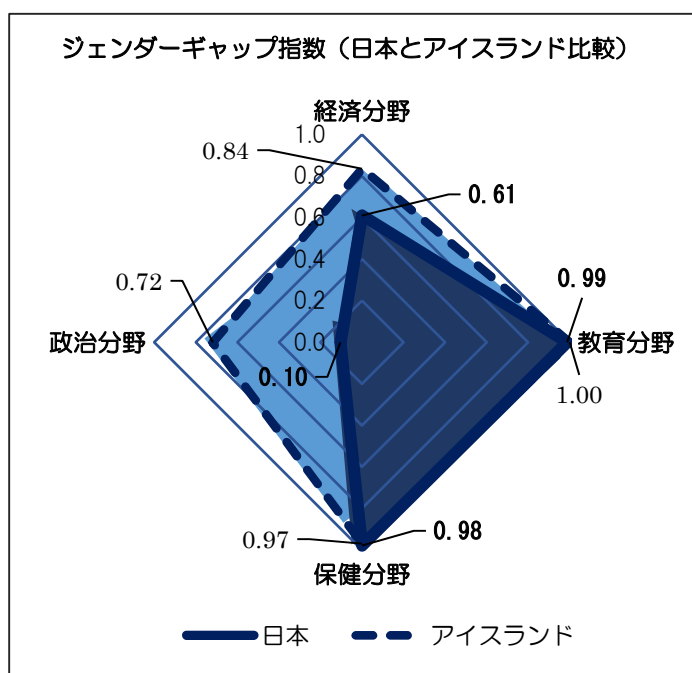
政治分野



頑張れ、日本！

これまでのメルマガで見てきたように、私たちが暮らす日本では固定的性別役割分担意識（例えば「男性は仕事、女性は家庭」など、性別によって「こうあるべき」と期待される役割意識）が根強く残っていて、知らず知らずのうちに私たち自身や家族の生活に大きな影響を与えています。日本では現在、「一億総活躍社会」と銘打ち、女性も男性も「一人ひとりが、個性と多様性を尊重され、家庭で、地域で、職場で、それぞれの希望がかない、それぞれの能力を発揮でき、それぞれが生きがいを感じることができる社会」の実現をめざして様々な取り組みを行っておりますが、世界的にみると日本は男女共同参画の分野で非常に遅れていると言われております。では、実際にはどの程度「遅れて」いるのでしょうか。

各国の男女共同参画の達成度を比較するために広く使われているのが「ジェンダーギャップ指数」と呼ばれるものです。ニュースなどでも度々取り上げられるので目にした事があるかもしれませんが、この「ジェンダーギャップ指数」は世界経済フォーラム（WEF）が毎年発表しているもので、「教育」「保健」「経済」「政治」の4つの分野におけるその国の男女間の格差を得点化したものです。



最新のジェンダーギャップ指数の総合ランキングでは、日本は調査対象国 145 カ国の内、101 位でした¹。ランキングの上位は、7年連続 1 位のアイスランドを筆頭に北欧諸国が占めており、それ以外の欧米諸国も軒並み 30 位以内と、欧米諸国において男女間格差が少なくなっている事がわかります。その他、アジアではフィリピンが 7 位、中国が 91 位、韓国が 115 位となりました。

左の図は、ランキング 1 位のアイスランドと日本との比較です。図表の数値は比率を得点化したもので、女性と男性の比率が 1 : 1 であれば得点は「1」、つまり男女格差がない状態をあらわし、反対に男性に対して女性の比率が少ないほど得点は「0」、つまり男女格差が大きい状態に近づきます。

ここから、日本では教育分野と保健分野ではほぼ「1」、つまり男女比率がほぼ同じとわかります。しかし、経済分野と政治分野の得点が極めて低いために、総合的なランキングで 101 位となってしまっています。それに対して、総合ランキングで 7 年連続 1 位のアイスランドで

¹ World Economic Forum 『The Global Gender Gap Report 2015』より

は、政治・経済の分野でも1に近い得点を得ており全体的にバランス良く高い得点となっています。

日本の得点を分野別にさらに詳しく見たものが下の表です。教育分野では、義務教育がうまく機能しているために識字率と初等～中等教育での男女比が1、つまり「完全平等」となっています。保健分野では、平均寿命は女性の方が長いので比率は1を越えています。

しかし、経済分野を見ると、教育、保健分野と比べて比率が低くなっており、特に「管理職割合」での比率は0.10と、際立って低くなっています。政治分野では女性議員、女性閣僚の比率ともに非常に低く、また日本は過去50年間に女性首相は誕生していないので、比率が0となっています。

	順位	女性/男性比率
教育分野	84	0.99
識字率	1	1.00
初等教育への参加	64	1.00
中等教育への参加	1	1.00
高等教育への参加	106	0.90
保健分野	42	0.98
出生時の男女比	0.94	0.92
平均寿命	1	1.06

	順位	女性/男性比率
経済分野	106	0.77
労働力参加率	82	0.65
同様の仕事での賃金格	69	0.60
平均年収	75	0.61
管理職割合	116	0.10
専門職・専門技術職割	81	0.87
政治分野	104	0.10
女性議員	125	0.10
女性閣僚	51	0.29
過去50年間の女性元首	64	0.00

ここからわかることは、日本では、特に意思決定に関わる場における女性の割合が極めて低いということです。意思決定の場に女性が少ないという事はすなわち、私たちの日々の生活に関わる政策や、企業の経営に女性の声が反映されにくいということです。日本が男女共同参画社会をめざすためには、女性が政治経済の分野においてもリーダーシップを発揮できる社会になる事が重要です。

まずは身近なところから！

「男女共同参画」と聞くと「自分には関係ない」と考える方もたくさんいます。でも、男女共同参画は、老若男女や既婚未婚を問わず全ての人に関わりがあります。男性だから…女性だから…と、これまでの社会の慣習や固定的性別役割分担意識によって生き方が限定されてしまうのではなく、男性も女性もその人個人が持つ能力や志向、ライフステージに合わせて理想の生活バランスで暮らすことが出来る社会を目指しているのが男女共同参画社会です。

また、「男女共同参画」というと堅苦しい、難しいイメージがあるようです。しかし、これまでご紹介してきたように、実は私たちの毎日の生活が「男女共同参画」で考える内容そのものなのです。政府が様々な法令や行動計画を掲げて男女共同参画社会の推進を目指していますが、トップダウンでは限界があります。私たち一人一人が、自分から、家族から、身近なところから男女共同参画をボトムアップでも進めて行くことが、誰もが暮らしやすい社会の実現への近道ではないでしょうか。これまで「当たり前」と思っていたことが、実は「思い込み」や「偏見」によって知らず知らずのうちにすり込まれた事だったり、自分自身や家族を「固定的性別役割意識」によって決め付けてしまっているかもしれません。まずは周りの状況を、ちょっとだけ男女共同参画の視点を意識して見てみる、そして自分ができることから変えてみませんか。